

東日本支部だより

2015 年 3 月 1 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

**** 定例研究会のお知らせ ****

今後の例会予定

3 月以降は下記の日程で開催を予定しています。ふろ
ってのご参加、お待ちしております。

第 83 回 3 月 14 日(土) 於:有明教育芸術短期大学

卒・修論発表 *詳細は下記をご覧ください。

第 84 回 4 月 4 日(土) 於:大東文化大学

卒・修論発表 *詳細は下記・次頁をご覧ください。

第 85 回 5 月 2 日(土) 於:東京藝術大学 研究発表

第 86 回 6 月 6 日(土) 於:国際基督教大学 博論発表

○修士論文発表 1

5. 中世日本における「林邑楽」

—新たな概念の形成とその要因—

江口 麗華 (東京藝術大学大学院)

6. 東アラブ古典音楽におけるヴァイオリン奏法の規範形成
とサーミー・シャウワーの足跡

酒井 絵美 (東京藝術大学大学院)

7. トルコの近現代における民俗音楽の展開

—民俗音楽楽団 Yurttan Sesler Korosu を例に—

鈴木 麻菜美 (国立音楽大学大学院)

◆東日本支部第 83 回定例研究会

時 2015 年 3 月 14 日(土) 午後 2 時～5 時

所 有明教育芸術短期大学 301 教室

(りんかい線 東雲駅 徒歩 9 分)

(<http://www.ariake.ac.jp/access.html>)

司会 尾高 暁子 (東京藝術大学)

◆東日本支部第 84 回定例研究会

時 2015 年 4 月 4 日(土) 午後 2 時～5 時

所 大東文化会館 3 階 K302

(東武東上線 東武練馬駅 徒歩 3 分)

(http://www.daito.ac.jp/file/block_49512_01.pdf)

○卒業論文発表 1

1. 長崎における中国系芸能とその音楽

涼松 育子 (国立音楽大学)

2. 川越祭り囃子の研究 —王蔵流の伝承と現状の調査—

杉谷 紫野 (お茶の水女子大学)

3. 仮面ライダーシリーズの変身シーンにおける効果音の

要素と変遷

横山 洸 (お茶の水女子大学)

4. 都市の音 —新宿駅におけるサウンドスケープ—

横畠 怜子 (お茶の水女子大学)

○卒業論文発表 2

1. ガルシア・ロルカとフラメンコ

—『13 のスペイン古謡』を中心に—

畑 萌葉 (東京藝術大学)

2. 小学校音楽科における三味線の授業実践について

橘田 美穂 (宮城教育大学)

○修士論文発表 2

3. セイレーンの歌を聴く

—南米アンデス地域における音楽の精霊—

相田 豊 (東京大学大学院)

4. 津和野の鷺舞 —芸能とその伝承—

KAHLOW, Luise (法政大学大学院)

5. 平安・鎌倉時代における箏の演奏伝承に関する研究

李 小艾 (法政大学大学院)

6. 長唄囃子における能楽手法の研究

—明治以後の演奏者、レパートリー、音響実態—

鎌田 紗弓 (東京藝術大学大学院)

7. 山田耕筰作曲オペラ・バレエ『あやめ』(1931)の研究

—1920～30年代における音楽活動の再考のために—

太田 郁 (東京藝術大学大学院)

司会 井上 貴子 (大東文化大学)

定例研究会発表募集 (7月・12月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、7月4日の例会については4月20日必着、12月5日の例会については9月20日必着で、東日本支部事務局までお申し込み下さい。なお、発表希望を提出後1週間を経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

***** 定例研究会の報告 *****

◆東日本支部第81回定例研究会

時 2014年12月6日(土) 午後1時30分～4時40分

所 東京藝術大学音楽学部 5-109室 (5号館1階)

司会 茂手木 潔子 (日本大学)

○特別企画

1. 異文化接触と音楽

—ミャンマーにおける西洋楽器の受容を例に—

発表・進行 丸山 洋司

(上野学園大学・東京藝術大学)

講演・演奏 ウ・イ・ノエ U Yee Nwe

(ヤンゴン文化芸術大学客員教授)

通訳 ス・ザ・ザ・テ・イ Su Zar Zar Htay Yee

(東京藝術大学大学院)

(特別企画要旨)

本企画は、ミャンマーにおいて西洋の楽器が伝統的な音楽実践の中にどのように組み込まれたのかについて、ミャンマー様式のピアノ演奏の第一人者である、ウ・イ・ノエ氏の実演や解説を交えながら明らかにし、「異文化接触と音楽」というテーマについて考察する視座を提示するものであった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパからミャンマー(当時のビルマ)にピアノなどの楽器が伝えられた。今日、これらの楽器は、在来の伝統楽器と同様に、ミャンマー古典音楽の演奏で使用されている。日本人の中には「ピアノのようなヨーロッパ起源の楽器は、西洋の楽曲を演奏するために作られたのだから、別の地域の伝統音楽を演奏するにはふさわしくない」と考えて、このような現象を奇妙に感じる者も少なくないだろう。しかしミャンマー古典音楽の演奏者たちは、自分たちの美学にあった音が得られるような楽器であれば、外

来の楽器であっても在来の音楽の演奏用として積極的に取り入れてきた。ミャンマーの音楽家からみると、日本の伝統音楽の演奏者は、既成の音楽様式に新しい楽器を導入することに関して保守的にみえるのかもしれない。

このように異文化と接触したときに、音楽文化が変容するプロセスは国や地域によって様々であり、その全容を解明することは今日の民族音楽学の研究テーマの一つである。当初は、異文化接触がもたらす音楽の変化を「伝統的な音楽文化の衰退」として否定的に捉える傾向が強かった。しかし1970年代後半以降、そのような変化の創造的な側面に注目し、新しい音楽ジャンルが生まれた歴史的背景を明らかにする研究が行われるようになってきている。本企画では、最初に丸山が「異文化接触と音楽」というテーマについて、これまで民族音楽学の領域でどのような研究が行われてきたかについて簡略にまとめて発表した。続いて、ミャンマーにおいてピアノの演奏法が、パッターとよばれるミャンマー古典音楽の竹琴の奏法に基づいてどのように開発されたのかについて、ウ・イ・ノエ氏に両方の楽器の実演を交えて解説していただき、ミャンマーにおけるピアノの受容が「既存の文化を豊かにする創造的な試み」として捉えられることを明らかにした。

(傍聴記：柘植 元一)

ヤンゴン文化芸術大学客員教授であるウ・イ・ノエ氏によるパッターとサンダヤーの実演および奏法をめぐる講演が、本発表の眼目であった。これに先だち、本発表の企画者である丸山洋司氏が「異文化接触と音楽文化の変化」という視点から、このミャンマー様式のピアノ音楽を考察するアプローチを提示して、先行研究(B.ネトルや M.カルトミ)を紹介した。次いで、ウ・イ・ノエ氏に質問をしながら情報とデモンストレーションを引き出していく形式で、本発表は進められた(通訳はス・ザ・ザ・テ・イ氏)。

素人目には、サンダヤーは人差し指だけで弾くけったいなピアノに映るが、「サンダヤーはミャンマーの伝統音楽をより豊かにした」というウ・イ・ノエ氏の説明は、意表を突いて

説得力があった。質疑応答では、サンダヤーを「異文化接触」という視座で表面的に捉えることについての疑義が出された。筆者はモルタザー・マハジュービーのイラン様式のピアノや、アブダッラー・シャヒーシンのピアノによるタクスイムを思い起こしながら、サンダヤーの名人芸を堪能した。

○研究発表

2. 常磐津節『槍持奴』・『月の辻君』復曲の試み

—煤茂都流に残された三味線譜による—

発表・演奏 前原 恵美 (有明教育芸術短期大学)

常磐津 文字兵衛 (常磐津三味線演奏者)

解説 配川 美加 (放送大学)

杵屋 佐之義 (長唄三味線方)

(発表要旨)

本発表は、日本舞踊の煤茂都流に残されている三味線譜のうち、伝承の途絶えていた常磐津節の『槍持奴』・『月の辻君』復曲の試みについて、復曲試演音源および実演を交えて発表するものであった。

まず、配川氏が煤茂都流に残された三味線譜の全体像や復曲の状況、本作品の初演・再演情報、あらすじ、構成について概説した。

続いて、これまで煤茂都流三味線譜による長唄復曲演奏を手掛けてきた佐之義氏が、煤茂都譜が義太夫節の「いろは譜」の系統をくんでいることを三味線を用いて概説した。また、長唄の佐吉譜は、義太夫節の「いろは譜」をもとに煤茂都扇性と4世杵屋佐吉が相談しながら工夫されたものであることや、初期の佐吉譜が次第に細かいリズム、指使いや奏法まで表記できるよう工夫を重ね、自らの備忘のための楽譜から第三者に教授するための楽譜へと変遷してきたことを指摘した。

さらに、文字兵衛氏と前原が本作品の復曲過程を報告し、

続いて文字兵衛氏の弾き語りによる復曲試演音源を用い、旋律型について、①「他の常磐津節作品に共通の旋律型」がそれなりに多用されていること、②「他の常磐津節作品に共通の旋律型に類するもの」が散見されること、を具体的に示した。そして、このように常磐津節を象徴ないし連想させる旋律型を用いながらも、実は作品全体を通して聞いていると典型的な常磐津節らしい作品に聞こえない点については、「平ウチ」の頻繁かつ連続的な使用や、クドキ→鍵踊り→謎々での二人のやり取りに引き戻される構成等と併せて考えると、本作品の作曲と初演の間に時間的な余裕がなかったことを示唆しているとした。また、同音源を用い、本作品の音楽的特徴として、①辻君がすっきりとした美人としてではなく、やや垢抜けない庶民的な女性として描かれていること、②奴が粹で勇ましい美男としてではなく、むしろひょうきんな雰囲気を持つ男性として描かれていること、を該当箇所の例示により明らかにした。

以上の考察を踏まえて、常磐津節作品で典型的に描かれる美男美女ではない二人を題材にしている点で、本作品は稀少な作品であると特徴づけるとともに、これには初演時に本作品を踊った三代目中村歌右衛門の芸域が広く、敵役から女形まで、時代物も世話物も演じ、変化舞踊を得意とした役者だったことが大きく関わっているとした。最後に文字兵衛氏と前原により本作品の置きから辻君の出までを会場で試演した。

なお、本発表は前原が科学研究費の助成を受けて行っている「江戸～昭和期の常磐津節演奏家に関する基盤研究」(基盤研究 C、研究課題番号:25370123)の成果の一部である。

(傍聴記：土田 牧子)

はじめに配川美加氏によって、今回の復曲対象である『槍持奴』と『月の辻君』が、後ろ面(後頭部に面をつけて前面と背面で別の人物を踊り分ける趣向)を使った演出による「一曲」であったことが示された。詞章本や絵画資料によっ

てそれが明らかになっただけでも非常に興味深いのだが、今回は、前原恵美氏と常磐津文字兵衛師によってその発見が肉付けされ「曲」として示されたことにさらなる高揚感を覚えた。杵屋佐之義師による三味線譜の解説もわかりやすく、四人の方がタッグを組むことで資料研究と復曲という作業が一つに繋がっていく様子をわくわくしながら拝聴した。発表内で復曲の過程が具体的に示されたことも興味深かった。確信を持って復曲できた箇所、想像に頼らざるを得なかった箇所などが示されたことで、復曲という作業の実際の思い描くことができたように思う。発表に辿り着くまでも大変な困難が伴ったこと、そして完成させるにはまだ課題が山積みだと伺ったが、将来的にはぜひ舞踊を伴った形で上演して頂きたい作品であり、それが楽しみと思えるような充実した発表であった。

◆東日本支部第 82 回定例研究会

時 2015 年 2 月 7 日(土) 午後 1 時～2 時 50 分

所 東京藝術大学音楽学部 1-3-30 室 (1 号館 3 階)

司会 伏木 香織 (大正大学)

○研究発表

1. ワイヤー録音によるウイグル古典音楽ムカームの復元研究

アブドセミ・アブドラハマン (東京藝術大学)

植村 幸生 (東京藝術大学)

(発表要旨)

十二ムカームは中国新疆ウイグル自治区のウイグル人が伝承する古典音楽である。現行の十二ムカームはトルディ・アホン(1881-1956)の伝承に基づくと考えられ、1951 年頃に

「十二ムカーム整理工作組」が彼らの演奏をワイヤー録音（1930～50年代の録音再生システム）に収録した。このほど、当時の録音物と思われるワイヤーリール 50 本余りが新疆芸術学院に保管されていることが判明した。発表者を含む東京藝術大学と新疆芸術学院の関係者チームは 2011～14 年度に、同学院および日本のオーディオ技術者の協力を得て、そのうち 48 本（以下、本資料とする）を日本国内で再生しデジタル化する作業を行い、あわせて上記工作組の一員だった万桐書氏、連曉梅氏夫妻へのインタビューおよび同氏所蔵資料の調査も行った。本発表はその成果報告である。

再生作業の結果、本資料 48 本中 38 本から音が取り出された。そのうち十二ムカームが 23 本を占め、残りはウイグルの民謡（特にイリ民謡）、建国前後の創作歌曲、新疆の各民族（キルギス、カザフ、モンゴル、タタール、シボ、ダフル）の民謡と器楽、漢民族の音楽（京劇、説唱、琵琶、二胡）等であった。数名の演奏者は特定できたものの、トルディ・アホンの演奏と断言できる音源は見つかっていない。

一方、万桐書氏夫妻へのインタビューから、本資料は確かに 1951 年 8 月の第一回ムカーム調査の録音であることがわかった。同調査ではトルディ・アホン親子がチョンナグマを、イリの音楽家ローズ・タンブール（1873-1957）とアブドゥウェリ・ジャルラユフ（1910-1998）がダスタンとメシュレプを演奏したという。採譜集『十二木卡姆』（1960）に整理されたムカームは、同調査と 1954 年第二回調査の結果を比較校合して成立したことも証言から明らかとなった。

本資料は 20 世紀前半以前のムカームの様式を具体的に知る最も有力な資料となるだけでなく、万桐書氏の証言、所蔵資料との対照により一層その資料的価値を高めることができる。今後は音源の聞き取りによる楽曲および演奏者の同定、採譜、採詞とともに、本資料の保管、公開、利用方法の検討をあわせて進める必要がある。本資料が現地におけるムカーム伝承と教育に活用されることを強く望んでいる。（本研究は 2012 年度カワイサウンド技術・音楽振興財団研

究助成、2013 年度平和中島財団アジア地域重点学術研究助成を得て行われた。）

（傍聴記：尾高 暁子）

Rachel Harris によれば、ウイグル十二ムカームとは、新中国建国後に、選ばれし地域と伝承者の演唱をもとに再構築された「規範」である。そもそも何故 12 なのか。なぜヤルカンド地方を選ぶのか。これらの基本的な疑問は表面化せず、十二ムカームはウイグル音楽のセンターに位置づけられた。今回復原された録音は、こうした規範化の出発点にあたる。この重要な第一次資料は、その後の楽譜集刊行も含めて調査を主導した万桐書氏が、文革の嵐から身を賭して守りぬいたものだ。まずは、この貴重な資料の復原にあたった発表者と日中共同研究グループに、心から敬意を表したい。録音記録が皆無に等しく、内容の同定には詳細な聴取が必要という。その過程で、たとえ「規範」からもれた幻のムカームが見つからなかったとしても、同一曲の演唱における地域差（質疑応答で言及）など、伝承の広がりが再認識されることは間違いないだろう（参考：Rachel Harris, *The Making of Musical Canon in Chinese Central Asia: The Uyghur Twelve Muqam*, Ashgate, 2009）。

2. 植民地朝鮮における邦楽実態

—『京城日報』の新聞記事を中心に—

金 志善（日本学術振興会特別研究員 PD）

（発表要旨）

本発表の目的は、植民地朝鮮における邦楽の実態を調べ、邦楽が朝鮮社会にどのような役割を果たしていたのかを考察したものである。

植民地朝鮮に関する歴史学の先行研究は、主に、政治史や経済史を中心に行われており、当時の人々がどのような考えと意識を持ち、どのような文化的な活動を行ってきたのかについてあまり関心が払われなかった。特に、植民地朝鮮社会において文化領域の一つである音楽分野は、植民地という激動の時代を経験したことから朝鮮音楽、西洋音楽、日本音楽が混在するようになり、産業化とともに開発され発展した蓄音機やラジオなどの普及により様々なジャンルの音楽が人々の生活の一部となり、ともに暮らす存在となった。

植民地朝鮮における最大都市であった京城（現、ソウル）は、1925 年現在、人口の約 3 分の 1 を日本人が占めていた。多くの日本人が朝鮮に移住したことに伴い、朝鮮に滞在する日本人によりコミュニティが形成され、朝鮮内の日本社会が存在していた。もはや朝鮮は、朝鮮人だけの社会ではなく、政治的には日本の支配下にあり、朝鮮に定着した日本人がともに存在する社会でもあった。

このような社会状況の中で、朝鮮には多くの日本人邦楽家が来訪したと見られているが、植民地朝鮮における邦楽の実態については全く把握されていない状況であった。これらを究明するためには、在朝鮮日本人音楽社会と植民地朝鮮の音楽社会を把握し、在朝鮮における邦楽の実態を明らかにする必要がある。

従って、本発表では、邦楽の全体像をつかむため、在朝鮮日本人向けに発刊された『京城日報』の音楽記事に注目

した。1907 年から 1945 年まで発刊された『京城日報』を網羅し、邦楽に関する記事を抽出する作業を行い、2288 件のそのデータを得た。これらの邦楽に関する新聞記事の特徴を四つに整理してみると、①植民地朝鮮に移住した邦楽家・愛好家による公演情報 ②日本から来た邦楽家の演奏情報 ③日本で行われる邦楽の事情情報 ④邦楽の音楽知識情報が含まれていた。これらの記事をその事例として確認し、どのような邦楽家がどのような活動を行ったのかなど、その一部の実態を明らかにした。それとともに、邦楽をジャンルごとに分類し分析することと、邦楽と朝鮮楽との関係などについて解明して行く課題を残した。

（傍聴記：山本 華子）

本発表は、植民地朝鮮における邦楽の実態を調べ、邦楽が朝鮮社会に果たした役割を考察するものである。そのため、朝鮮在住の日本人向けに刊行された新聞『京城日報』から関連記事を抽出するという方法がとられた。

対象記事は 1907 から 1945 年までの邦楽関連記事（広告を除く）2288 件である。発表者はこれらを、①植民地朝鮮在住の邦楽家・愛好家による公演情報、②日本から来演した邦楽家の演奏情報、③日本の邦楽事情に関する情報、④邦楽の音楽知識情報、に分類して紹介した。

フロアからは、1910 年代を対象とした日韓共同研究と能楽上演に関する日本語論文など、先行研究の存在について言及された。また、媒体の性格上、記事になりやすいものとなりにくいものがあること、予定と結果が異なることもあるので情報の取り扱いに注意すべきとの指摘があった。現在は膨大な記事をデータベース化した段階であり、今後、それを用いた有益な研究が展開されることを期待したい。

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2015 年 6 月 5 日 (6 月下旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務局(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

Fax: 03-3832-5152、E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25 字×8 行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきます。

(東日本支部だより担当)

東日本支部委員会からのお知らせ

昨年度大会の総会を経て、平成 27・28 年度の東日本支部委員会が以下のメンバーで発足しました。宜しくお願いいたします。会員各位の研究活動に役立つ支部運営が目標です。研究企画や支部活動へのご意見などは、当支部事務局(所在地は学会本部事務局に同じ)か、支部専用メールアドレス(tog.higashi@gmail.com)まで、お気兼ねなくお寄せ下さい。(以下支部役員一覧 *印は参事)

支部長 : 尾高暁子

支部担当理事 : 澤田篤子

経理担当 : 尾高暁子、前島美保

ホームページ・ML 管理担当 : 佐竹悦子*

支部だより担当 : 近藤静乃、田辺沙保里*、福田裕美

発送担当 : 中村美奈子

例会担当 :

【理事】尾高暁子、澤田篤子

【委員】井上貴子、奥山けい子、マツ・ギラン、濱崎友絵、伏木香織、前原恵美、丸山洋司

【参事】安納真理子、江口麗華、ウメトバエワ・カリマン、木岡史明、鯨井正子、酒井絵美、田村にしき、萩谷沙耶佳、宮内基弥、村山佳寿子、安原道子

編集後記

新しく発足した東日本支部委員会にてお届けする今号の支部だよりでは、3月・4月に行われる卒修論発表のご案内と、昨年12月及び今年2月の例会における特別企画・研究発表の報告を掲載いたしました。原稿執筆にご協力下さった方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は6月下旬を予定しております。(T)

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：尾高暁子、澤田篤子、

近藤静乃、田辺沙保里、福田裕美

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com
